

ケードゥプジェの PV III 338-340 の解釈について

村 上 徳 樹

1. はじめに 本稿は PV III 338-340 についてゲルク派の学僧ケードゥプジェ (mkhas grub rje dGe legs dpal bzang po, 1385-1438, 以下 Kh) の解釈を検討することを目的とする。Kh は PV III 338-340 全てを唯識派の他者認識説を説くものと理解している。その一方で、PV III 338 を経量部説と解釈し、PV III 339-340 を唯識説と解釈するチベット人の解釈に異論を提示している¹⁾。このような解釈は、サキャ派のラマダンパ・ソナムゲルツェン (bLa ma dam pa bSod nams rgyal mtshan, 1312-1375, 以下 L) の TN に確認できる。PV III 339-340 を唯識説とすることについて Kh と L との間にそれほど大きな相違はない。問題は PV III 338 を経量部説とみるか唯識説とみるかにある。特にこの問題に焦点をあてて考察することとする。

2. PV III 338 の解釈とテキスト問題 Kh と L の解釈が異なっている要因として、テキストの問題をあげることができる。両者は PV III 338 を解釈する上で依拠するテキストが異なっている。Kh は現行のチベット語訳を採用して解釈する。他方、L はそれとは異なった翻訳を用いて解釈している。この L が採用する翻訳は PV III 338 注釈箇所 の PVP および PVT の翻訳と合致していることから²⁾、PVP と PVT の翻訳者であり、PV の最初の翻訳者でもあるマ・ゲウウェーロドゥ (rMa dGe ba' i blo gros) 訳であると考えられる。実は、現行のサンスクリットテキストと内容的に一致しているのはこの翻訳である。それでは Kh が採用する翻訳は何かと言えば、それはプラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta) が変更したテキストの翻訳であり、それが現行のチベット語訳となっている³⁾。

テキストの相違と両者の解釈の相違を明確にするために、対応するサンスクリットテキストとチベット語訳、および Kh と L に基づいた拙訳を対比させておく。(L が依拠するチベット訳を (A) とし、Kh が依拠するチベット訳を (B) とする)

yadā niṣpannatadbhāva iṣṭo 'niṣṭo 'pi vā paraḥ /

vijñaptihetur viśayas tasyāś cānubhavas tathā //

gang tshe grub pa de yi dngos // gzhan 'dod pa' am mi 'dod pa //
mnam rig rgyu yi yul dag kyang // de yi de ltar myong ba yin // ⁴⁾ (A)

〔望ましい対象または望ましくない対象として〕その存在が成立している他者〔すなわち外界の対象〕が、望ましい〔形象〕または望ましくない〔形象として現れる〕認識の原因たる対象でも〔ある時、対象は〕その〔知に昇っている形象の〕通りに経験される⁵⁾。

*yadāniṣpannatadbhāva⁶⁾ iṣṭo 'niṣṭo 'pi vā paraḥ /
vijñaptihetur viṣayas tasyāś cānubhavas tathā //

gang tshe mnam rig rgyu yi yul // gzhan 'dod pa' am mi 'dod pa //
de yi dngos por ma grub pa // de ni de ltar myong ba yin // (B)

認識の原因である他者たる〔外界の〕対象は、望ましい〔形象〕または望ましくない〔形象として知に昇っている通りの〕その存在として成立していない〔けれども、対象〕それは〔知に昇っている形象の〕通りに経験される⁷⁾。

まず、サンスクリットテキストの相違は pāda a の niṣpanna- と aniṣpanna- とである。この相違と直接対応しているチベット語訳の相違は (A) 訳 pāda a の grub pa と (B) 訳 pāda c の ma grub pa とである。この違いの故に偈全体のチベット語訳の構造も異なってきた。

この grub pa と ma grub pa というテキスト上の相違が、両者に経量部説とみるか唯識説とみるかの解釈の相違を引き起こしていると考えられる。両者の解釈は知に昇っている形象の通りに対象が経験されるという点では一致している。異なっているのは、その知に昇っている形象と外界の対象との関係である。L は、外界の対象と知に昇っている形象とは一致しており、外界の対象は知に昇っている形象の通りに経験されると解釈している。それに対して、Kh は、外界の対象は知に昇っている形象通りの存在として成立しておらず、外界の対象とは無関係に知に昇っている形象が経験されると解釈している⁸⁾。この点の相違が、外界の対象を承認する経量部とその存在を否定する唯識派の違いであり、その違いの故に、両者は同偈を経量部説とみるか唯識説とみるか見解を異にしている。このような両者の解釈の相違は、根本的には、grub pa と ma grub pa というテキストの相違により導きだされている。従って、このテキストの相違が、両者に解釈の相違を引き起こしていると考えられるのである。

3. PS と PV の対応関係についてのケードゥブジェの解釈 以上のように、Kh と L は依拠するテキストを異にしており、それが両者の相違の要因となっている。

しかしテキストの相違だけが、両者の解釈に違いをもたらしているのではない。というのは Kh は自説としては (B) 訳を採用するが、(A) 訳にも言及しているのである。つまり、Kh は (A) 訳を知っていたにもかかわらず、唯識説として解釈できる (B) 訳を意図的に採用していると考えられるのである。ではなぜ Kh は (B) 訳を採用し、PV III 338 を唯識説と解釈したのか。結論から言えば、彼は PS およびその自注と PV との対応関係からこの答えを導き出している。彼の理解では PV III 338 を含めた PV III 338-340 に直接対応するのは PS I 9b およびその自注である。そのコンテキストで Kh は PS I 9b に先行する PS I 9a との論理関係を問題としている。

PS I 9a と PS I 9b の間には「何故かと言うならば (ci'i phyir zhe na)」という問いがあり、その問いについて Kh は次のように述べている。

〔それは〕どのような疑問が生じたために問うたのか。その答えとして『経』の偈と自注でどのように説明しているのか。〔答えよう。その疑問は〕知を所量とした量においてのみ自己認識 (rang rig) が果〔となるの〕であり、外界として認められている青などを所量とした場合、自己認識 (rang rig) は果ではない〔のではないか〕という疑問〔が経量部に生じたのである。それに〕対して、一つの対象が別々〔の人〕の知に望ましいもの、望ましくないものとして〔異なって〕現れるような場合でも、知自身と一体〔となっている対象〕の認識 (shes pa rang gi bdag nyid rig pa) が果である。従って、青などを所量とした量においても、果は〔知〕自身と一体となっている対象の認識 (rang gi bdag nyid du gyur pa' i yul rig pa) であると〔唯識派が答えている。このように〕“対象を持つ知が” (PS I 9b 自注) 云々の『経』の言葉により示されている。(TN 4b5-7)

つまり PS I 9a 自注で「〔知〕自体の認識それが果となる (rang rig pa de ni 'bras bur gyur ro)」と唯識派が述べた時、外界対象の認識が他者認識であり、知自身と一体となっている対象 (shes pa rang gi bdag nyid du gyur pa' i yul) の認識が自己認識であると区別する経量部にとって、その「知自体の認識 (rang rig pa)」は必然的に自己認識となる。しかし、唯識派にとっては全ての知の対象は知自体に他ならないので、「〔知〕自体の認識それが果となる」と述べた時、自己認識と他者認識の双方が含意して述べられている。そこで経量部は唯識派に対して「知自身と一体となっている対象の認識」は自己認識に他ならないのであり、なぜそれが他者認識となるのかと問うわけである。その問いについて唯識派が PS I 9b およびその自注でその認識が他者認識となる理由を述べるのである。これが Kh の PS I 9a と PS I 9b の文脈の理解である⁹⁾。

この PS I 9ab の解釈がそのまま PV III 338-340 の解釈へと適用される。すなわち、PV III 337d で「経験こそが果である (myong ba nyid ni 'bras bu yin)」と説かれていることと PS I 9a 自注で「〔知〕自体の認識それが果となる」と説かれていることが並行関係にあり、PS I 9a と PS I 9b 間で立てられた問いが、PV III 337d と PV III 338 間でも問われている。その問いに答えるために、唯識派が PV III 338-340 で「知自身と一体となっている対象の認識」がなぜ他者認識となるかを示していると Kh は理解しているのである¹⁰⁾。

従って、このような論理関係から PV III 338-340 は全て唯識派の他者認識を説いているからこそ有意味なのであり、PV III 338 を経量部説とする L のような解釈を Kh は受け入れることができなかったのである。

〈略号〉 Ms: *The Sanskrit Commentaries on the Pramāṇavārttikam from the Rāhula Sāṅkṛtyāyana's Collection of Negative I. Sanskrit Manuscripts of Prajñākara Gupta's Pramāṇavārttikabhāṣyam. Facsimile Edition*, Ed. Shigeaki Watanabe. Patna / Narita 1998:s. Einleitung. PS I: cf. Hattori 1968. PV: Dharmakīrti. *Pramāṇavārttika*. Miyasaka ed. PVP: Devendrabuddhi. *Pramāṇavārttikapañjikā*. D No.4217. PVṬ: Śākyabuddhi. *Pramāṇavārttikaṭikā*. D No.4220. TN: mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po. *Tshad 'bras gyi rnam gzhag chen mo*. bKra shis lhun po ed. TL: bLa ma dam pa bsod nams rgyal mtshan. *Tshad ma rnam 'grel gyi 'grel pa legs par bshad pa 'i snying po. The Collection Works of Bla ma dam pa bsod nams rgyal mtshan*. Volume Dha.1999. HATTORI [1968]: *Dignāga On Perception*, Cambridge, Massachusetts. 福田 [1988]: ケードゥブジェの『プラマーナ・ヴァールティカ』註釈における自己認識と他者認識の設定方式について、『日本西藏学会々報』第 34 号, pp.8-15.

- 1) Cf. TN 3b1-4b4 2) Cf. PVP 223b3-4, PVṬ 220a6-7. 3) プラジュニャーカラグプタのテキスト改変の意図については今後の課題としたい。 4) Cf. TN 3b2, TL 226a6. 5) Cf. TL 226a4-5. 6) Cf. Ms 198a2: yadā 'niṣpannatadbhāva.
7) Cf. TN 5b6-6a1. 8) Kh の理解では、認識に形象を昇らせるものは習気である。それは PV III 339 で説かれていると理解している。cf. TN 6a3-4. 9) このような経量部と唯識派の対論は、両派の学説における自己認識と他者認識の設定方式の相違に基づいている。この問題については福田 [1988] を参照されたい。 10) Cf. TN 5a6-5b3.

〈キーワード〉 ケードゥブジェ, ラマダンパ・ソナムゲルツェン

(東京大学大学院)

ruled by the Juqu 沮渠 family (442-460).

198. On the Interpretation of PV III 338-340 by mKhas grub rje

Atsuki MURAKAMI

This paper aims at studying the interpretation of PV III 338-340 by mKhas grub rje. He interprets these three verses as those which establish *gzhan rig* (other-cognition) of Yogācāra. On the other hand, he has raised an objection to Tibetans who consider PV III 338 as presenting Sautrāntika theory, and considers PV III 339-340 to present Yogācāra theory. Such an interpretation can be traced to bLa ma dam pa bsod nams rgyal mtshan's PV commentary. Focusing on the difference of between both opinions, we examine why mKhas grub rje needed to understand these three verses as such. Most particularly, do these two commentators take PV III 338 as presenting Sautrāntika theory or Yogācāra theory?

199. *Rang gi mtshan nyid kyis grub pa* again

Yōichi FUKUDA

Rang gi mtshan nyid kyis grub pa is one of the key concepts of Tsong kha pa's Madhyamika philosophy, and Dr. Yoshimizu translates it as pertaining to what is "intrinsically real." In this paper, I investigate this concept in Tsong kha pa's interpretation of Yogācāra philosophy. In my opinion, *mtshan nyid* refers to the reason or cause of the characters, postulated on the basis of mundane words or concepts, and *kyis* means "by the power of" (*kyi dbang gis* as paraphrased by Tsong kha pa himself). This concept reflects the *mtshan mtshon gzhi gsum* relationship unique to Tibetan Buddhist literature. In this relationship, *mtshan nyid* means the reason for the predicate *mtshon bya* to the subject *mtshan gzhi*. If one takes this reason *mtshan nyid* as the real existent character of the postulated predicate *mtshon bya*, then that person can grasp the concept of *rang gi mtshan nyid kyis grub pa*.